

1 流域治水対策について

図1

国土交通省「流域治水」の基本的な考え方 より

「流域治水」の施策について

- 流域治水とは、気候変動の影響による水災害の激甚化・頻発化等を踏まえ、堤防の整備、ダム建設・再生などの対策をより一層加速するとともに、集水域（雨水が河川に流入する地域）から氾濫域（河川等の氾濫により浸水が想定される地域）にわたる流域に関わるあらゆる関係者が協働して水災害対策を行う考え方で、
- 治水計画を「気候変動による降雨量の増加などを考慮したもの」に見直し、集水域と河川区域のみならず、氾濫域も含めて一つの流域として捉え、地域の特性に応じ、①氾濫をできるだけ防ぐ、減らす対策、②被害対象を減少させるための対策、③被害の軽減、早期復旧・復興のための対策をハード・ソフト一体で多層的に進める。



写真1 天竜川 堤防点検のための除草作業



2022年6月27日撮影 天竜川堤防(浜北区地内)

写真2 稲刈り後の稲わら 河道の流下能力の維持に対する懸念



2022年9月24日撮影

橋下の水道管に絡みついた稲わら (安間川 若草橋 市野町)

絡んだ稲わらに氾濫した雨水で倒壊したと思われるフェンス



稲わらで詰まりそうな排水路

2022年9月24日撮影



2022年9月25日撮影

天竜川水系安間川
河川整備計画
(天竜川下流西遠ブロック)

平成16年(2004年)
に策定された静岡県の
安間川河川整備計画

遊水地の整備を計画

平成16年4月

静岡県



2019年1月23日撮影 遊水地工事現場



2019年3月 遊水地運用開始



2019年5月21日
遊水地効果で川の水面40cm低下の報道あり
ほぼ同時刻 まんごく橋上流は越水



まんごく橋 3.2m幅



安間川

西支川

2019年5月21日撮影 まんごく橋



2019年5月21日撮影 安間川まんごく橋上流

まんごく橋から上流は整備計画に入っていない



河川工事施工箇所

安間川 浜松環状線 まんごく橋周辺 浜松市HP



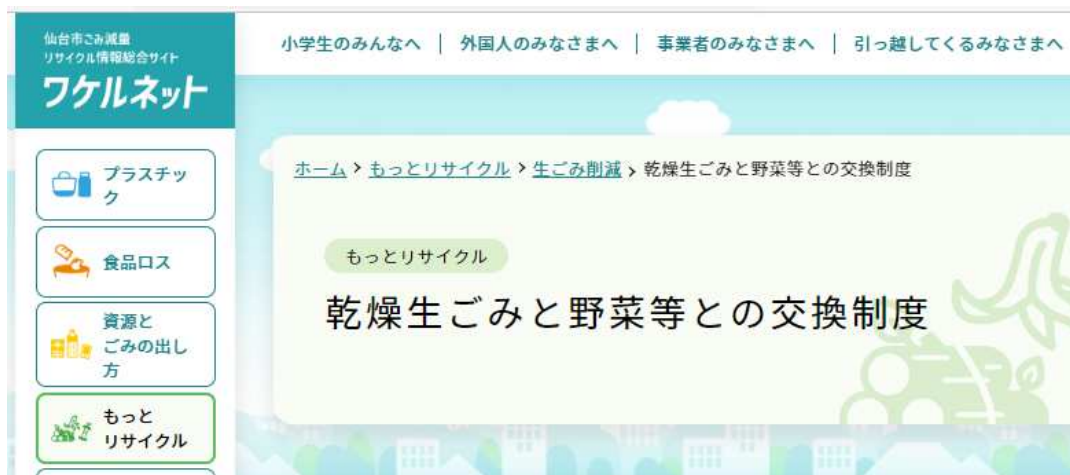
2017年6月21日撮影 笠井上町



参考1 仙台市の取り組み

仙台市ごみ減量リサイクル情報総合サイト ワケルネット より

野菜市で『乾燥生ごみ』
新鮮野菜と交換。
また、スタンプカードに
押印し、そのスタンプ数
に応じてごみ減量・リサ
イクルグッズ等と交換す
るなどの仕組み



2002年11月
に登場したキャ
ラクター「ワケル
くん」を活用して
インパクトのある広報媒
体を作成しているとのこ
と



参考2 仙台市泉区泉ヶ丘小学校区での資源物回収の取り組み

2022年8月10日撮影

- ・市の回収の空いている曜日を活用し、資源物回収(毎週水曜日)
- ・子ども会育成会の指定業者が収集して回る(市は収集しない、別途、資源物回収に対する市の奨励金交付あり)
- ・雑紙に加え、アルミ缶、ビン類、布類も回収
- ・子ども会育成会は、回収後に集積所を見回りチェックを実施とのこと
- ・問い合わせがあれば、市から地域のためになると水曜日の資源物回収への協力を依頼



集積所に出された雑紙、アルミ缶などの資源物 →

2 家庭ごみ減量の推進に向けて

資料4

参考3 熊本市の取り組み

熊本市公式ホームページより

(1) 定期的に収集する家庭ごみ

分別の区分	内 容	収集回数
燃やすごみ	生ごみ、紙くず、プラスチック製の商品、繊維くず、革類、ゴムくず、木くず、草・花・芝生など	週2回
紙	新聞紙・折込チラシ、段ボール、紙パック（500ml以上）、その他の紙	週1回
プラスチック製容器包装	カップ類、袋類、ボトル類、パック・トレイ類、緩衝材、ふた・ラベルなど	週1回
資源物	なべ類、空きびん・空き缶、古着類、自転車	月2回
ペットボトル	ペットボトル	月2回
特定品目	蛍光管、水銀体温計・水銀血圧計、ガス缶・スプレー缶、ライター、電池類が取り外せない小型家電製品、電池類	月2回
埋立ごみ	ガラス類、せともの類、小型家電製品類など	月2回

(2) 熊本市のごみ収集の変遷(抜粋)

平成10年4月	「もえるごみ」を「燃やすごみ」に名称変更。 「もえないごみ」を「埋立ごみ」に名称変更。 「資源ごみ」を「資源物」に名称変更。 「雑誌(チラシ・包装紙・紙箱)」を「その他の紙」に名称変更。 「新聞」に折り込みチラシを含める。 週3回の「もえるごみ」収集を週2回の「燃やすごみ」収集へ変更。 「資源物」収集品目のうち「新聞・折り込みチラシ」、「段ボール」、「その他の紙」の収集を分離し、新設して週1回収集する「紙」の収集品目とする。 月2回の「資源物」収集品目に、「ペットボトル」を追加。
---------	--

(3) 熊本市ごみカレンダーアプリ



(4) 紙の収集日 集積所の状況 2022年7月27日撮影



3 インクルーシブな遊び場の普及について

資料5

西中瀬中央公園

2022年8月31日撮影



東京都 砧公園

砧公園ホームページより

みんなのひろばの遊具紹介

ここは障がいのある子もない子も一緒に遊べる広場です

●利用時間

4月～8月(春・夏) 朝9時～夕方5時
9月～3月(秋・冬) 朝9時～夕方4時

●複合遊具(3才～12才むけ)
複数のデッキがスロープでつながり、だれもがてっぺんの滑り台を楽しめます。車いすから滑り台に移りやすいよう、滑り台の前は一段高くなっています。車いすを運びやすいよう、幅広の階段が設けてあります。

●大型ブランコ(6才～12才むけ)
3種類のブランコがあり、自分に合ったブランコを選べます。
・血型ブランコ
寝転んだり、お友達や付き添いの人と一緒にブランコを楽しめます。
・イス型ブランコ
背もたれと安全バーがついています。



●船型遊具「みらい号」(3才～12才むけ)
車いすや歩行器のまま「乗船」し、船のトップデッキまで上がれます。車いすから滑り台に移りやすいよう、滑り台の前は一段高くなっています。滑り台は幅が広く、お友達といっしょに滑ることが出来ます。



●ぐるぐるマウンテン(回転遊具)(6才～12才むけ)
みんなで乗れる回転遊具です。乗り場全体が背もたれの形になっています。回したり回してもらったり、みんなで楽しみましょう。



●きりかぶ(シェルター遊具)
切りかぶの隠れ場所です。落ち着ける場所で一休みしたり、かくれんぼしたり、窓から景色を眺めてみましょう。



●迷路(3才～12才むけ)
車いすも通りやすいゆとりのある迷路です。あちこちに触って遊ぶ仕掛けがあったり、壁についたヒヨコさんの足跡をたどったりできます。



●楽器遊具青(3才～6才むけ)
●楽器遊具緑(6才～12才むけ)

●おはなしフラワー(伝声管)(3才～6才むけ)

●スプリングシーソー(3才～6才むけ)

6 子宮頸がん予防について

データ提供: 浜松市健康福祉部

グラフ1

HPVワクチン接種実人数

(2022年7月末時点)

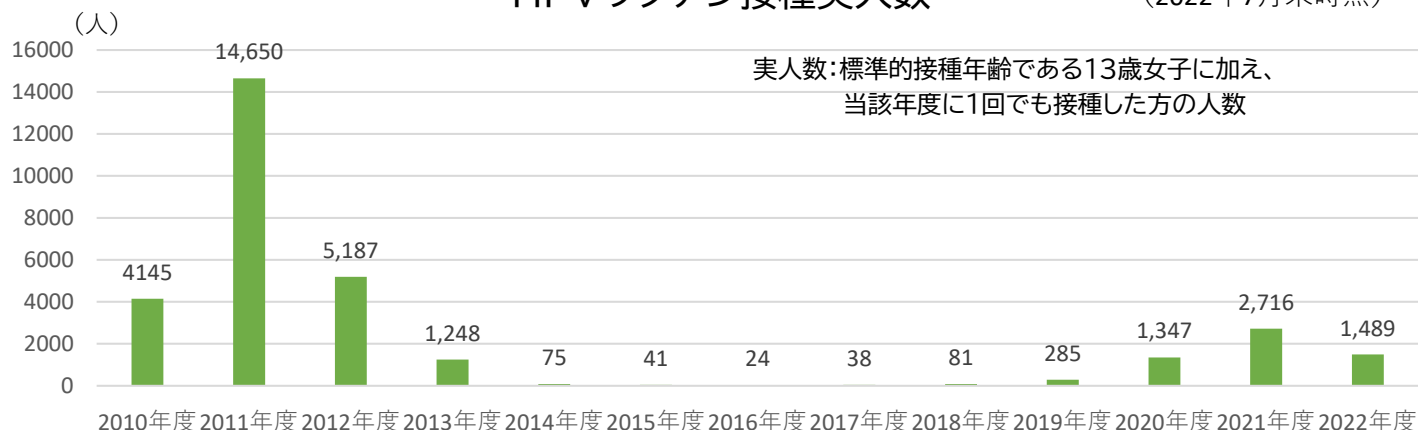


表1

HPVワクチン接種において副反応疑いがあった方の人数(年度別、実人数)

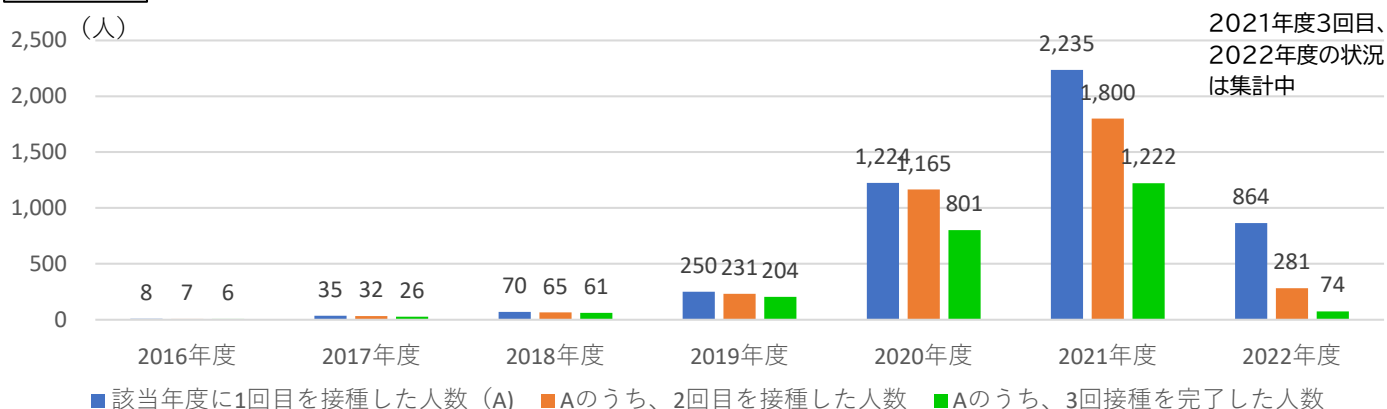
2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
1人	8人	0人	0人	2人	1人	0人	1人	1人	0人	0人	0人	1人

- ・年度は「予防接種後副反応疑い報告書」が提出された年度。
- ・人数は浜松市が医療機関等からの「予防接種後副反応疑い報告書」により報告を受けた人数。
- ・「予防接種後副反応疑い報告書」による報告は予防接種後に現れた症状を報告するものであり、予防接種との因果関係や予防接種健康被害救済と直接結びつくものではない。
- ・件数には予防接種法に基づく定期予防接種のほか、希望により受ける任意接種の報告を含む。

グラフ2

HPVワクチン接種状況

(2022年7月末時点)

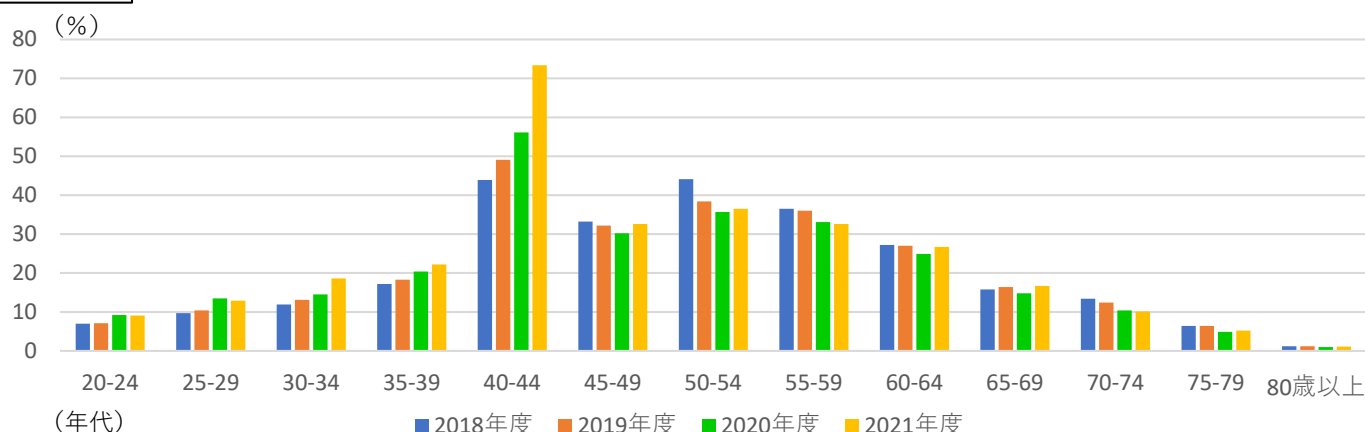


<条件補足>

- ・〇〇年度に接種した合計人数ではなく、〇〇年度に「1回目」を接種した人を追っている
- ・1回目接種した人を追っているため、転入し、2回目から浜松市で接種した人数は計上していない
- ・転出したため、2回目や3回目を接種できなかった(接種記録が浜松市にない)人は計上していない

グラフ3

子宮頸がん検診の年代別受診率



HPVワクチンと子宮頸がん検診

子宮頸がんを苦しめないために、私たちができることは、
HPVワクチンの接種と子宮頸がん検診の受診の2つです。

なるほど!

ポイント

1

HPVワクチンで
HPVの感染を予防

ポイント

2

子宮頸がん検診で
がんを早く見つけて
治療

子宮頸がん検診について

20歳になったら、子宮頸がんを早期発見するため、
子宮頸がん検診を定期的に受けることが重要です*。

※HPVワクチンで防げないタイプのHPVもあります。

検診では、前がん病変(異形成)や
子宮頸がんがないかを検査します。

継続して安心!

ワクチンを接種していても、していなくても、20歳になったら
2年に1回、必ず子宮頸がん検診を受けて下さい。

図2

セルフケア介入に関するWHOの 推奨事項

子宮頸がん検診の一環としてのヒトパピ
ローマウイルス (HPV) セルフサンプリング



World Health Organization

human reproduction programme hrp research for impact

WHO recommendations on self-care interventions

Human papillomavirus (HPV) self-sampling as part of cervical cancer screening

What is self care?

WHO's definition of self care is the ability of individuals, families and communities to promote health, prevent disease, maintain health, and cope with illness and disability with or without the support of a health-care provider.

WHO consolidated guidelines on self-care interventions

- Worldwide, an estimated shortage of 18 million health workers is anticipated by 2030.
- At least 400 million people worldwide lack access to the most essential health services.
- During humanitarian emergencies, including pandemics, routine health services are disrupted and existing health systems can be over-stretched.

図3

2022年9月8日付 WHO Europe報道抜粋

スウェーデンでの HPV 自己サンプリングにより、
子宮頸がんのより迅速な排除が可能に



HPV self-sampling in Sweden leading to faster elimination of cervical cancer

8 September 2022 | News release | Reading time: 3 min (880 words)

"With the new measures against human papillomavirus (HPV), we predict that cervical cancer elimination in Sweden could happen 5 years from now. If the pandemic had not occurred, it would have been much, much slower."

Professor Joakim Dillner is a cancer specialist at the Karolinska Institutet in Sweden. He explains how the country was forced to rethink its approach to cervical cancer screening when non-emergency health care stopped in the capital region in April 2020 due to the COVID-19 pandemic. For 3 months, no one could access cervical cancer screening; then, when the national programme restarted, social distancing requirements meant clinics were unable to provide clinician-led sampling.

To solve the problem, HPV self-sampling kits were sent to all eligible women in the country, including those between 23 and 29 years of age who had previously been offered cytology-based screening (commonly called a Pap smear), which is conducted by a clinician.

The Stockholm region, where 330 000 self-sampling kits were sent out, saw a dramatic 10% increase in population test coverage – from 75% to 85% – in just 1 year.

330,000個のセルフサンプリングキットが発送されたストックホルム地域では、わずか1年で、母集団のテストカバレッジが75%から85%に劇的に10%増加しました。